

コロナ禍とメディア・リテラシー（文責 森本洋介）

私は「メディア・リテラシー」（以下MLと略す）という能力（個人的には一種の学力であるにとらえています）を研究しています。MLには統一的な定義が存在せず、研究者や組織によって多様な定義が提唱されていますが、個人的には「メディアを通じて流される情報について多面的かつ客観的に分析し、また自分でも多様なメディアによる情報発信や表現を行うことなどを通じて、再構成・再構築されたイメージ（＝リプレゼンテーション）について思考・判断・表現する能力」であると考えています。言葉で説明するとわかりづらいこともあるので、実際の新型コロナウイルスに関するニュースをもとに説明します。

まず、2020年3月30日に放送されたあるテレビ局の夜のニュースの全体構成を記した表1を見てください。

表1 2020年3月30日に放送されたあるテレビ局の夜のニュース構成

No.	項目名と簡単な内容
1	タレントの志村けんさん、新型コロナで死亡
2	東京都小池知事緊急会見 夜の酒場控えて
3	夜の街でのクラスターの可能性（三密になりやすい）
4	具体的な場所 若者はカラオケ・ライブハウス 中高年はバー・ナイトクラブ
5	六本木で取材に応じたナイトクラブの従業員のコメント
6	3月の渋谷駅周辺の滞在者数の推移
7	今回の分析範囲
8	スタジオ キャスターコメント「大切な誰かに移さないように」
9	京都の大学生… 新たな「感染」も ゼミ旅行で感染。送別会で交流後、地域の交流会に参加し移す
10	県立広島大学の女子学生スペイン旅行から帰国後感染確認
11	危機感を抱く若者も 3月7日に取材した女子高生を再び取材。自粛要請会見後姉からLINE「まじで友達と別れて早く帰ってきて」「じーちゃんとかばーちゃんに移ったら死んでしまう可能性があるから」
12	海外では10代20代の若者（基礎疾患なし）が死亡してしまうことも
13	ヴィッセル神戸 酒井がコロナ陽性 症状経緯
14	0歳も感染。本日の感染者数
15	スポーツ、芸能ニュース
16	コロナ以外の政治、社会ニュース

表1だけを見て、「多面的かつ客観的に分析」しろと言われても、困るでしょう。そこで

「多面的かつ客観的に分析」するための視点が必要になります。例えばルネ・ホブズ(Hobbs, R.)というアメリカの研究者が、以下の「5つの批判的な問い」を紹介しています。

1. 作者は誰で、何が目的か
2. 注目を集め、くぎづけにするためにどのような創造的なテクニックが使われているか
3. このメッセージを異なる立場の人びとがどのように理解するか
4. どのようなライフスタイル、価値観、視点が提示されているか
5. 何が除外されているか

(ルネ・ホブズ著：森本洋介、和田正人監訳(2015)『デジタル時代のメディア・リテラシー教育：中高生の日常のメディアと授業の融合』東京学芸大学出版会、62頁)

特に今回重要な問いは3～5です。なお、この後の分析については私個人の解釈であり、他の方々は異なる解釈をすることもありえますし、あってよいということをごとわっておきます(この点は、実は3.の問いのことです)。4.の問いから考えると、このニュースでは全体を通して新型コロナウイルスの感染拡大の原因が若者にあることが強調されています。時間数を細かく示していないのですが、ニュース項目4の「中高年はバー・ナイトクラブ」の内容はその次のナイトクラブの従業員とのインタビューに関係しているものの、2つを合わせても1分弱であり、全体からみれば割合は少なく、かつその後若者の話題が連続することから考えると、印象にも残りにくいと考えられます。

紙幅の都合上、詳細な分析は控えさせていただきますが、このニュースの全体構成からは

- ・有名タレントが死亡しており、他人事ではない事態になっている。
- ・感染しても比較的症状の軽い若者が感染拡大の原因になりうる。実際にある大学ではクラスター感染の原因となってしまった。
- ・だから「自粛要請」にきちんと従わないと困ったことになる。
- ・きちんと「自粛要請」に従っている模範的な若者もいる。
- ・若者だって軽度では済まないケースもあるし、0歳の子どもすら感染している。有名スポーツ選手の感染も発覚した。

といった言外のメッセージも、内容を丁寧に分析すれば読み取ることは可能です。これらのことから、このニュースの暗示的な意味としては「若者は楽観的に行動せずに、模範的な高校生を見習って政府や自治体の「自粛要請」にきちんと従いなさい」と受け取ることも可能ではないでしょうか。

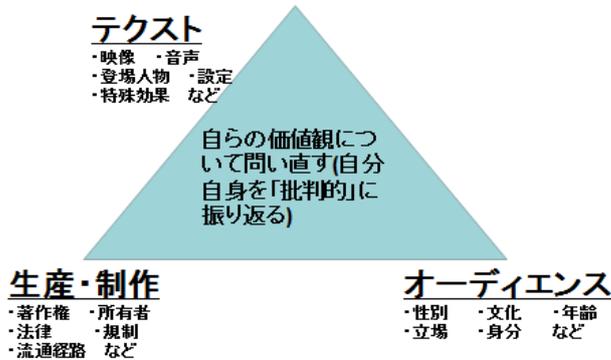
ここで「5つの批判的な問い」の5.を考えてみましょう。確かに、このニュースの後、再び感染が拡大し始めた7月の感染状況を見ても、いわゆる「夜の街」に関連する20～30代の若者の感染が問題視されました。ところが、その前に北海道で「第2波」の到来の予感として発生したのは高齢者による昼カラオケでのクラスター感染でした。また、青森県で最初に発生した感染者は3月中旬にスペインのツアー旅行に行き帰国後発症した高齢者数

名でした。マスコミはこれらのことをまったく伝えていないわけではありませんが、先ほどの若者の事例のように「高齢者が感染拡大の原因になっている」ような報じ方はしていません。人生100年のこのご時世、定年退職後にパワフルに国内外に旅行したりボランティア等で移動したりする元気な高齢者は少なくありません。そういった人たちは感染拡大の原因としては「除外されている」のでしょうか。

ここまで、簡単ではありますが、情報を「多面的かつ客観的に分析」するMLの考え方を、実際のニュースの読み解き方を例にして説明してきました。別に私はこのニュースをつかったマスコミに文句を言いたいわけでも、新型コロナウイルスを若者が広げているという状況に疑義を唱えているわけでもありません。マスコミは実態を正確に伝える義務はありますが、万能ではありませんし、局によって考え方も違います（「5つの批判的な問い」の1.はそのような視点です）。また毎日「47都道府県のどこで何人新規感染者が出た」、「〇日前に比べて本日の〇〇駅周辺の手人は〇%減少した」という報道事態に悪意があるわけではなく、数値によって今の危機的な状況をわかりやすく伝えたいのでしょう。

しかし、結果的に「自粛警察」なる人たちが登場したように、「私たちは遊びたい衝動を抑えて、政府の言うとおりにがんばって自粛しているのに、それに従わずにやりたいことをやっている自由気ままな人たちが感染を拡大させている」という一部の視聴者・読者（オーディエンス）の不満が爆発していると考えられます。実際に医療関係者の子どもが保育園に登園することを拒否されたり、感染者が多く出た地域のナンバーの車が感染者の少ない地域にやってくると石を投げられたり罵声を浴びせかけられたりするといったことがありました（県外ナンバーだからといって必ずしも県外の人に乗っているわけではありません。冷静に考えれば想像できることです）。MLの考え方においては、以下の三角形の図にある、それぞれの頂点にある事項（テキスト、生産・制作、オーディエンス）がそれぞれ作用しあうことで、その真ん中にある、自分自身の価値観が形成されると想定します。逆に言えば、この図が示すように、それぞれの相互作用によって自分自身の考え方が形成されることを自分で客観的に考察することで、思い込みや偏見、思考のバイアスを回避できると考えます。それを可能にするための機会を提供するのがML教育というわけです。

分析の視点(三角形モデル)



実際にML教育をする際は、上記で説明したようなニュース分析を学習者個人がまずやってみます。その次に、他の学習者と意見交流することで、自分の理解がどうであったのか（正しいとか間違いとかではなく、自分自身の考え方を見つめなおすために、他人の意見を参考にするという意味）を確認します。最終的には三角形の図にあるように、「自らの価値観について問い直す」こととなります。言葉で書くと簡単ですが、実際には長期間にわたり悶々とした気持ちが頭の中で渦巻く活動になります。自分自身を客観的に見つめなおすという作業は、自己否定と自己肯定を繰り返すことでもあり、それまでの自分の考え方をリニューアルないしアップデートすることでもあります。それまで当たり前のように考えていたことを、「このままではいけない」と考えるのは、実は非常に苦痛なことであり、だからこそ多くの方は現状維持を続けようとするわけです。私は博士論文において、このような思考過程がML教育の授業で学習者に起こっていることを、カナダ・トロント市の高校の授業を3ヶ月間毎日のように観察することで見出しました。3ヶ月というのは、実はそこまで長くありませんが、このような複雑な思考過程は一夕一朝に成るものではないということを発見したということでもあります。

実は今、日本で推進されている「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）」も、そこで身につけさせたい能力はこのような思考能力（ただしMLのようなある意味哲学的な能力というよりは、教科内容を理解し日常的に活用する能力）であると考えられます。つまり、MLと同様に一朝一夕で身につく能力ではないということです。少なくとも、学習者にグループ活動や調べ学習、プレゼンテーションをやらせれば自然に身につくものではなく、「つらいけど、でも楽しくてためになる」という実感を学習者に湧き起こすものがある必要があるのでしょう。